氏　　名	**江田　すみれ**
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	乙第77号
学位授与年月日	2020（令和2）年3月6日
学位授与の要件	日本女子大学学位規程第５条第２項該当
学 位 論 文 題 目	**「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト** **―異なるジャンルのテクストでの使用状況と学習者の誤用―**
論 文 審 査 委 員	主査　　清水　康行　（日本文学専攻　教授） 副査　　衣川　隆生　（日本文学専攻　教授） 　　坂本　清恵　（日本文学専攻　教授） 　　松森　晶子　（英文学専攻　教授） 　　山崎　誠　　（国立国語研究所　教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は「ている」「ていた」「ていない」がどのように用いられているかを、会話・新書のコーパスを資料として調べると同時に学習者コーパスを用いて、学習者にとってテンス・アスペクトはどのような点が困難かを記したものである。従来、アスペクトの研究は数多くなされてきた。本研究は「ている」について、代表形である「ている」だけでなく、「ていた」「ていない」を取り上げ、それらが異なる種類のテクスト中において実際にどのように用いられているか、中心的な用法、周辺的な用法について考察した。また、いくつかの用法についてはテクスト中での機能についても検討した。

本研究は2012年度日本女子大学叢書として刊行が認められた『「ている」「ていた「ていない」のアスペクト―異なるジャンルのテクストにおける使用状況とその用法―』（くろしお出版2013）に、その後、公開が進んだ学習者コーパスのデータをもとにして学習者の誤用を分析した論文、未来の効力持続の論文を付加し、記述が不十分であった箇所を訂正して改稿したものである。

本研究は11章からなる。

記述にあたり、非過去形を「る」、過去形を「た」と表現し、そのほか「ている」「ていた」も用いる。

第一章では先行研究を概観し、本研究の目的を述べる。

金田一（1950、1955）、藤井（1966）、奥田（1977、1978）などにより、動詞の分類、「ている」の意味分類など、アスペクト研究の概念が整理された。町田（1989）は、アスペクトは動詞の性質だけでなく動詞句のタイプなど様々な要素によって決定されるとし、従来の動詞を中心とするアスペクト研究から、文中の他の要素との関係まで視野を広げた研究をした。工藤（1995）は文単位の文法を脱却し、テクストの中でテンス・アスペクト

を位置づけている。話しことば・書きことば両者を対象とし、文脈の中での文法現象を捉えた。また、テンス・アスペクトの捉え方も、形式・意味・機能の三つの視点から行っており、テクストの中でのアスペクトの機能を述べている点が注目される。「パーフェクト」を大きく取り上げ、その機能について多くを語った。迫田久美子他（2008）は日本語学習者の縦断的発話コーパスを用いて習得研究を行い、同じ形式と分類される文法形式がテンス・肯定否定などに関わらずすべて同様の性質をもつ、という前提をはずしてデータと向き合うことの必要性を述べた。

以上のように、「ている」の研究は「動詞+ている」の形を研究テーマとするところから始まり、完成相と継続相の対立を取り入れ、文中の他の要素との関係を取り上げ、テクスト内でのアスペクト形式の機能を分析する研究まで進んできた。

本研究はこれまでの研究成果を踏まえ、「ている」「ていた」「ていない」のそれぞれの意味・用法、文法上の性質、テクスト中での機能を調査し記述する。その際、以下の3点を目的とする。

１）「ている」「ていた」「ていない」を個別に取り上げ、それぞれが固有に持つ問題点を洗い出す。

２）テクストの種類の違いと「ている」「ていた」「ていない」の使われ方の違いを検討する。

３）学習者の誤用例を検討し、学習者にとって「ている」「ていた」「ていない」はどこが難しいかを考える。

第二章では本研究で用いるコーパスについて述べた。

母語話者コーパスは、会話は現代日本語研究会編（1999）『女性のことば・職場編』、『男性のことば・職場編』、新書は日本語教育支援システム研究会編『CASTEL/J』より自然科学入門書　社会科学入門書、小説は『新潮文庫の100冊』より選んだ。小説は一部において参考にした。それぞれ、小規模コーパスを作成して用いた。

学習者コーパスでは迫田久美子他　『多言語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）、』、李在鎬他『日本語学習者作文コーパス』『タグ付きKYコーパス』を資料とした。

第三章のテクストの違いとテンスでは新書のテンスについて述べた。新書の基本的なテンスは「る」である。時系列的に事態の発生を述べる場合は「た」が用いられるが、そこから導き出される結論、解説、筆者の判断、一般論などは「る」によって表現される。会話が話し手のいる現在を基本として現在・過去・未来を表現し、小説の基本的なテンスが「た」であるのと異なっている。

第四章では「効力持続」について述べる。過去に起こった事態が基準時である現在に影響を与えるもの、基準時が未来でそれに向かって何かをしながら待つというものを「効力持続」とする。先行研究では「経験」「属性」「記録」などがあると記述されているが、本研究ではこれらは「効力持続」の下位分類とした。

第五章では、会話・小説・新書のコーパスでの「ている」の使われ方を「運動短期」「運動長期」「繰り返し」「結果状態」「効力持続」「性状」「完了」に分類してテクストごとの使われ方を見た。

「運動短期」は小説ではある程度見られたが、会話・小説・新書のテクスト3種においてよく用いられる動作・作用の継続は「運動長期」であった。

「運動短期」は日常的な動作・作用を表すのに対し、「運動長期」は会話では仕事関係の内容、新書では自然現象や社会現象あるいは思想など、長期にわたる継続を表し、語彙も複雑である。

「効力持続」は、会話の中では、現在と関係させることを選択的に「効力持続」で表現することによって、場合によっては一種の配慮表現としても働いている例があった。

新書において「効力持続」は先行研究を引用する場合によく用いられる。「効力持続」のもつ、過去の事態が現在に影響するという点と、証拠をあげて述べる「記録」の用法、「ている」が統括主題の存在する文脈で用いられるということが大きな役割を果たす。

また、新書においては、「運動長期」と「効力持続」は、「話題提供」「結論」を表現する機能を持つ。科学的な論考では、議論の前提や結論として、一定の自然現象や社会状況あるいは研究成果が示されることがある。これらを表現するために「運動長期」あるいは「効力持続」の「ている」が用いられている。

第六章は学習者による「ている」の使用状況を述べた。ストーリーテリング・インタビュー・描写・作文などのタスクの結果を用いた。母語話者との違いは、効力持続・性状があまり使えていないこと、運動長期は使用する語の範囲が狭いことである。

誤用の性質はタスクによって異なる。事態の連続を述べるタスクでは「ている」と「た」、作文（論述文）では「る」との混同が問題であった。

第七章は「ていた」の用法を取り上げた。

学習者は母語話者と比較して「ていた」が十分に使えていないという問題が見える。

「ている」は暗黙のうちに現在を設定時点とするという前提が成立するが、「ていた」を使う場合は、過去の基準となる時を、文脈あるいは基準時間によって示す、あるいは時間幅を示す必要がある。

思考動詞、関係を表す動詞、知覚作用を表す動詞など、動詞によっては「た」が過去の変化を表したり「た」の形がなかったりする動詞があり、それらは過去を「た」ではなく「ていた」で表す必要がある。結果動詞も、「た」が過去の変化を表すことは同様である。

「発見」は、ある状態があることに気が付いた、と述べる表現の仕方であり、「ていた」にもこの用法があることは高橋（1985）藤城（1996）などで述べられていたが、本書は、「発見」の「ていた」が会話・新書・小説のいずれにおいてもよく使われることを示した。

「発見」は「結果状態」「性状」だけでなく、動作継続の文でも見られた。変化の表現、感覚で捉えたことの表現、思い出しなどを表す場合に現れやすい。文末で多く見られる。

本研究では基準時が過去、未来で、その基準時以前に何らかの事態が起こったことを表現する形を「完了」とした。「完了」で許容度の高い文を作るためには以下の条件が必要である。

1）話題の焦点が「た」節にあること。

2）「ていた」節で表現されている状況と「た」節で表現される事態が状況の変化を示すものであること。「ていた」節から当然考えられる事態を「た」節で表現した場合は許容度が低くなる。

3）「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目が存在すること。

4）「発見」の意味を含むこと。

5）外部からの描写の文にすること。

第八章では学習者の「ていた」の使用状況について述べた。

学習者が「ていた」を使う時に混同するのは「た」が最も多く、続いて「ている」「る」の順である。タスクによって誤用の種類は異なり、事態の連続を表現する文章では「た」との誤用、論述文では「る」との誤用が目立った。

「まるごとの事態」（高橋1995）が使えず、事態の連続の「た」で表現すべきところを、過去の継続と考えて「ていた」にする誤用が見られた。また、文末ならば「ている」「ていた」になる形を連体修飾節内で「た」にするのは難しいようである。完了の形が使えれば正しい文になる例が見られた。完了の文が安定する条件は第七章で述べた。

第九章では「ていない」の用法を検討した。

「ていない」は未実現の場合に用いられる（寺村1984、井上2001）という議論と一般的に実態がない（松田2002）ことを表すという議論が行われている。未完了か事態の否定か、である。テクストごとにテンスを見てみると、「ていない」は会話・新書では過去の文脈でもよく用いられ、未完了とは言い切れないことがわかる。逆に「なかった」を使うのは小説のような基本テンスが「た」のテクストである。

「ている」に関する先行研究で扱われた多くの内容を「ていない」で確認したところ、肯定と否定はいろいろな点で違いが見られた。

「ていない」が動作継続の否定であるか、効力持続の否定であるか、では効力持続の否定がやや多いという結果になった。「た」と「ている」について、直接体験は「た」で、間接的な体験は「ている」で表現される、という議論（井上2001）を否定について考えたところ、否定の場合は違いがなく、どちらも「ていない」で表現されるという結果になった。

実現想定区間（井上2001）の議論では、「た」には実現想定区間が存在しないが、「ていない」の実現想定区間は必ずしも明確とは言えない。それはテクストの種類によって実現想定区間の考え方が異なることによる。

一方「なかった」の使用状況を調べたところ、社会科学では3/4、自然科学では約半数の「なかった」が、活用形の上で必然的に「なかった」になる例であった。

「なかった」は過去の事態、現在と切り離された過去、主節より以前の事態などが表わされ、「ていない」が現在と関係のある否定であるのと異なる。

第十章は第九章までのまとめである。

「ている」は基本的には現在の状態を表すが、過去の事態を現在に関係させる用法も持つ。また、完了の用法で、基準時以前の事柄を表すために「ている」「ていた」を用いることが可能である。結果動詞および状態動詞の一部では「た」は過去の変化を表し、過去の状態を表現したければ「ていた」を使う。つまり、「ていた」には動作継続の「ていた」と、「持っていた」「わかっていた」「思っていた」のような過去の状態の「ていた」が存在するわけである。「ている」「ていた」のような単純な形式が多くの用法を持つことを、教育にあたる側はしっかり意識している必要があるといえるだろう。

そしてそれが否定になると、ある事態が起こらなかったことは比較的容易に「ていない」で表現することができる。家村（2008）が学習者の発話の中で「ていない」は「た」以前に出現するという報告をしているがそれは「ていない」の使いやすさによると類推できる。

テクストのもつテンス的な性格とアスペクトの機能は関係が深い。「ている」に関して

言えば、「効力持続」は会話と新書では果たす役割がかなり違っていた。「運動長期」が重要な役割を果たしていることも、本研究が発見したことといえるであろう。

第十一章ではこれからの課題と日本語教育への提言を述べた。

今回は「ている」「ていた」「ていない」を別々に取り上げ、違いを際立たせるために分けて記述したことにより、共通の部分に対する配慮が少なかったことは否めない。また、母語話者については使用コーパスが小規模で十分なデータを用いたとは言えない。データの分類の判断に関しても多くは単独で行ったことは不十分であった。

日本語教育への提言としては、三点あげる。第一に、テンスの教育をもう少し丁寧にするべきである。その際、テクストの種類の違いによってテンスの使われ方が異なることを認識するべきである。

第二に、「ている」「ていた」「ていない」の教育を中級でもすることである。効力持続は教室で教師と共に学ぶ方が効果がある。運動長期は語彙の難易度が高い可能性がある。学習者の専門で必要な語彙と共に学ぶと効果があるであろう。「る」「た」「ている」にはまだ学習者が十分に理解していない部分がある。テンス・アスペクトの教育は初級だけでなく、中級においても必要である。

第三に、テクストによるアスペクトのふるまいの違いを考慮することである。会話と新書では同じ「ている」「ていた」でもその用法のどの面がより強く表面化するかが異なる。その点を考慮しながら本研究を教育に生かしていただきたけると幸いである。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

上掲委員による審査委員会は、江田すみれ氏（以下、著者）より提出された博士学位申請論文「「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト――異なるジャンルのテクストでの使用状況と学習者の誤用――」について審査し、以下のような結論を得たので、報告する。

論文の概要

本論文は、著者が日本女子大叢書14として公刊した著書『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト――異なるジャンルのテクストでの使用状況とその用法――』（2013年）に、刊行後、公開が進んだ日本語学習者コーパス・データを利用した学習者の誤用分析等を加え、記述が不十分であった箇所に増補訂正を施したもので、その主たる内容は、日本語の主要なアスペクト形式「ている」について、基本形「ている」のみならず、過去形「ていた」、否定形「ていない」も視野に入れ、これらが異なるテクストの中でどのような意味を持つのかを、新書・会話・小説の各コーパスを利用して調査・分析し、かつ、複数の日本語学習者コーパスを利用して、学習者にとって習得が困難な点について考察を加えたものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

第１章　研究の概要
１　はじめに　２　先行研究　３　本稿の目的　４　動詞の分類
５　「動詞＋ている」の用法の分類　６　本稿の構成
第２章　使用コーパス
１　概観　２　母語話者用コーパス作成
第３章　テクストの種類の違いとテンス
１　先行研究　２　調査方法　３　調査結果
４　「る」「た」「ている」の用法　５　まとめ
第４章　「効力持続」について
１　先行研究　２　「効力」の存在について　３　「記録」の用法
４　「結果状態」と「効力持続」　５　未来の効力持続　６　まとめ
第５章　「ている」の用法
１　「ている」の用法の分類
２　会話・小説・新書における「ている」の使用状況
３　会話における「ている」の用法　４　新書における「ている」の用法
５　「ている」の新書での機能
６　新書における「運動長期」「効力持続」のまとめ　７　会話と新書の「ている」
第６章　学習者による「ている」の使用状況
１　調査方法　２　学習者の「ている」の使用状況　３　誤用について
４　まとめ
第７章　「ていた」の用法
１　問題の所在　２　「ていた」の先行研究　３　「ていた」の使用状況
４　継続の「ていた」と完了相「た」の使い分け
５　過去を「ていた」で表示するもの　６　「ていた」「た」の使い分け
７　「ていた」が表す過去の状態　８　「発見」の用法の成立の条件
９　間接的な表現の「言っていた」　10　完了の「ていた」　11　まとめ
12　会話と新書における「ていた」
第８章　学習者の「ていた」の使用状況
１　学習者コーパス　２　タスクによる使用数の異なり
３　タスクと正誤の関係　４　節間の関係による分類
５　誤用のテンス・アスペクトによる分類　６　正用　７　「た」の誤用
８　「る」の誤用　９　「ている」の誤用　10　固定化した活用形
11　まとめ
第９章　「ていない」の用法
１　「ていない」についての先行研究　２　「ていない」の分類方法について
３　「ていない」の使用状況概観　４　「ていない」の使われ方　５　まとめ
第10章　まとめ
１　テンスについて　２　効力持続について　３　会話と新書の「ている」
４　学習者の「ている」の誤用　５　「ていた」について
６　学習者の「ていた」の使用状況　７　「ていない」

８　アスペクトについての疑問と答え
第11章　これからの課題と日本語教育への提言
１　これからの課題　　２　日本語教育への提言
資料および参考文

本論文の概要は、以下の通りとなる。

第１章では、「ている」に関する先行研究を踏まえた上で、本論文が明らかにしたい課題として、以下の３点を掲げる。

１）「ている」「ていた」「ていない」を個別に取り上げ、それぞれが固有に持つ問題点を洗い出す。

２）テクストの種類の違いと「ている」「ていた」「ていない」の使われ方の違いを検討する。

３）学習者の誤用例を検討し、学習者にとっての「ている」「ていた」「ていない」はどこが難しいかを検討する。

次いで、本論文では、動詞を「状態動詞」「継続動詞」「結果動詞」「形容詞的動詞」と分類し、「ている」の用法を「運動短期」「運動長期」「結果状態」「繰り返し」「効力持続」「性状」「完了」に分類して、議論を進めることを述べている。

第２章は、本論文での用例分析に使用したコーパスの説明となる。本論文では、新書・会話・小説それぞれを主対象とした複数の既存コーパスから、各分野の分量が均衡するように、一部を取り出し、分析用の小規模コーパスを作成している。本章では、それらの既存各コーパス、および、分析用コーパスの作成手順を述べる。併せて、日本語学習者作文の分析に用いるコーパスについても、説明している。

第３章では、新書コーパスでの文末の「る」「た」「ている」「ていた」の量的な分布と用法を調査し、新書の基本的なテンスは「る」であり、自然科学書では80％近く、社会科学書でも60％が「る」文末となること、基本的には「た」が用いられる過去の時系列的な描写でも「る」が現れることを導いている。また、「ている」については、「効力持続」の用法が重要であると指摘している。

第４章では、「ている」の用法のうち、多くの議論がなされている「効力持続」について、日本語母語話者・日本語学習者に行なった用例判定アンケート結果の分析を踏まえつつ、基準時が現在・未来で、その基準時以前に起こった動作・作用が何らかの効果・影響を残す場合を「効力持続」とし、基準時が過去か未来で、基準時以前に別の事態が起こった例については、「効力」が明確に読みとれない例があるため、「完了」とする立場を示す。

第５～９章では、新書・会話・小説の各コーパスにおいて、「ている」「ていた」「ていない」が、それぞれ、どのように用いられているかを調査・分析する。併せて、「ている」「ていた」については、日本語学習者の使用状況・誤用も、取り上げている。

第５章では、まず、「動詞＋ている」の分類基準として、動作・作用が一定時間継続する「運動短期」、長期的に動作・作用が継続する「運動長期」、動作・現象が何回も繰り返される「繰り返し」、ある事態が起こった後の状態を示す「結果状態」、第４章で詳述した「効力持続」、時間と関係がない状態を示す「性状」、単にある文以前の出来事を示

す「完了」の７つを挙げ、それぞれの代表例、および、相互の分類の区別について、解説をする。

そして、各コーパスでの「ている」の用例を比較し、「運動短期」は、小説に多く、新書では非常に少ないこと、「運動長期」は、いずれも多く用いられるが、特に新書での割合が高いこと、「効力持続」は、どのテクストでも、ある程度、使われていること、また、新書では「性状」が多いことを指摘する。さらに、「効力持続」では、会話と新書とで、「記録」の用法、および、統括主題の存在の有無に差があることを詳述している。

第６章では、日本語学習者の「ている」の使用状況を調査し、「効力持続」「性状」があまり使えないこと、「運動長期」を使用できる語の範囲が狭いこと、物語的なテクストでは「ている」と「た」、論述文では「ている」と「る」との混同が問題となることを指摘している。

第７章では、幾つかの観点から、「ていた」の用法を考察している。「ている」で用いたのと同様の意味的な観点からの分類では、コーパス間に、「ている」と同様の使用状況差があることを指摘する。二つの事態（文または節）の前後関係に注目した分類では、会話では、他の節と時間的に関係しない「継続過去」「結果状態過去」「繰り返し過去」「性状過去」の合計が多く、他との前後関係を持つ「同時」「完了」の合計が少ないのに対して、新書では、それぞれが半数ずつ程度になることを指摘する。また、過去を「た」ではなく「ていた」で表現する動詞があることを述べた上で、動詞の種類による「た」と「ていた」の使い分けを整理している。加えて、「ている」にはない「ていた」独自の用法として、ある状態に気付いたことを述べる「発見」を挙げ、各コーパスとも、その用法が多く見られることを示し、その使用法を詳述する。さらに、「た」節より以前の状況を述べる「完了」の「ていた」の用法にも注目し、この「発見」「完了」の用法があることにより、「ている」とは文章中で果たす役割が異なっていることを主張する。

第８章では、日本語学習者の「ていた」の使用状況を調査し、「た」との誤用が最も多く、続いて「ている」「る」の誤用が続くことを指摘する。事態の連続を表現する文章では「た」との誤用、論述文では「る」との誤用が目立つことも指摘し、その原因について、考察している。

第９章では、「ていない」について、「継続性の否定」「効力持続の否定」「繰り返しの否定」「性状の否定」の４つに分類した上で、各コーパス間で、「ていない」の使用量が、会話では多く、小説では目立って少ないこと、用法の割合では、新書では「継続性の否定」がやや少ないこと、会話では「性状の否定」が非常に少ないことを指摘する。また、「ていない」と「なかった」を比較すると、小説では「なかった」が非常に多いこと、会話・新書では、過去のことであることが了解されている文脈の中で、「なかった」ではなく「ていない」を用いることがよくあることが述べられている。

第10章は、これまでの議論のまとめであり、「ている」「ていた」「ていない」それぞれの用法を別々に取り上げ、細かく分析したことによる成果、異なるコーパス間を比較することで得たテクスト間での三者の用法差の指摘、日本語学習者の誤用の整理がなされたことを述べ、第１章で掲げた１）～３）の課題への答えとしている。

第11章では、本論文では、「ている」「ていた」「ていない」を別々に取り上げ、違いを際立たせて記述したことにより、共通の部分への配慮が不足したこと、また、原稿準備

当時と最近とを比較すると、コーパスの多様化・大規模化が進み、本論文の資料の扱い方が小規模であったことを認め、これからの課題として、幾つかの展望を述べる。加えて、本論文の成果を踏まえ、日本語教育への提言として、

1）テクストによってテンスの基本的な考え方が異なることを意識したテンスの教育をすること。

2）「ていた」を「ている」を単純に過去にするだけという考えを否定し、「ている」「ていた」「ていない」それぞれの特色を把握した教育をすること。

3）「ている」「ていた」「ていない」の基本的な用法・性格と同時に、テクストによって表面化する「効力持続」や「運動長期」などの機能の違いを考慮すること。

を述べ、全体の結びとする。

巻末には、「資料および参考文献」の一覧を掲げる。

審査の結果

上掲「論文の概要」で述べた通り、本論文は、これまで多くの研究者が注目し、学説も多岐にわたる日本語の主要なアスペクト形式「ている」について、採集用例のジャンルが異なる複数のコーパスを利用し、「ている」「ていた」「ていない」それぞれの意味・用法を丹念に分析し、さらに、日本語学習者コーパスに見出される誤用の分析を加えることで、当該形式の、語形による意味・ニュアンスの違い、ジャンルによる意味の偏り、学習者の誤用の傾向を具体的に整理することに成功し、当該形式の研究に、幾つもの新たな視座と知見を与えている。これらを踏まえ、当該形式に関わる日本語教育指導法について、重要な提言も行なっている。

日本語教育の場では、「ている／ていた」を単純なテンスの差とし、「ていない」を「ている」の単なる否定として説明することが多い現状に対して、本論文では、それら三形式を個別に取り上げ、新書・会話・小説の各ジャンルのコーパスから得られた多くの実例を詳細に記述・分析することを通して、ジャンルによる使用状況の違いを明らかにし、各型式に固有の意味・機能を明示し得た点は、高く評価できる。日本語学習者（留学生）が大学の授業で読む機会が多い新書での用例に注目し､小説･会話での出現と比較したことも、本論文の優れた特徴と言えよう。また、日本語学習者の三形式の個別の使用状況をコーパスに基づいて分析し、言語習得的な観点からその困難点を示している点も評価できる。

ただし、各用法の判定が基本的に著者のみの内省に基づいているため、審査委員の解釈と合致しない箇所もあり、論述の説得力を弱めている点が惜しまれる。各用例の構文的な異同、共起する修飾語句の影響等にも、より注意すべきであったかと思われる。また、コーパスごとの使用傾向の量的な特徴・差異を指摘する議論で、統計的な有意差の検証が示されていない点も、残念である。日本語学習者コーパスでは、各用例が、日本語コーパスのどのジャンルに相当する資料なのかが考慮されず、一括して処理されている点も、論文の一貫性を考えると、問題となろう。さらに、著者自身も認めている通り、本論文では、「ている」「ていた」「ていない」の違いを強調する論述に終始し、それらに共通する特徴への配慮が十分でない点は、理論的な研究への貢献を減じている。

こうした幾つかの問題点は存するものの、本論文が示した「ている」「ていた」「ていない」それぞれの形式が持つ特徴的な意味・用法の具体的な指摘・整理、それらを踏まえ

た日本語教育への提言は、日本語文法研究・日本語教育研究の深化・発展に寄与するものとなろう。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士学位論文に相応しいものであると評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことを報告するものである。